

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370500599		
法人名	特定非営利活動法人NPOみなまた		
事業所名	グループホーム キトさん家		
所在地	熊本県水俣市丸島町1-11-6		
自己評価作成日	令和2年11月13日	評価結果市町村受理日	令和3年4月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	令和3年3月12日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

丸島地区の集合住宅に設立した住宅改修型のグループホームである。住宅を提供して頂いたキトさんが70年近く住まれていた家で、昔から親しみを込めて「キトさんげ」と地域の方々から言われていた。集合住宅の中にある為、地域の方々との距離も近く、地域の方々が入居者の暮らしぶり見ながら、例え認知症になっても、住み慣れた地域で安心して暮らしていける。入居者と家族に安全と安心した生活を提供できるように職員全員で努力している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

モニタリングやミーティングでは全職員で意見交換する機会を設け、参加できない職員は事前に意見提案の内容を管理者に伝え、理念に基づいたケアの見直しを行い、サービスの質の向上に努めている。職員は利用者に笑顔でいて欲しいと願い、日々のケアを大切にしており、旬の食材を用いて作るおいしい食事や、利用者の自立と安心のための工夫と配慮がなされている。利用者が今望んでいるのは何かに視点を置き、魚釣りをしたい、家庭菜園を始めたいなど、利用者の笑顔を引き出す次の企画を温めている。玄関や洗面所には季節の花を活け、浴室の入り口などには手作りののれん、ポータブルトイレにはカバーをかけてあり、また、リビングで利用者と職員がチラシを見ながら談笑しているなど、ぬくもりのある家庭的なホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらい 3. 家族の1/3くらい 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関、リビング、事務所と理念を掲示しており、常日頃より、理念に沿ったケアになるよう心掛けている。	(人権尊重)(自由・安全・安心)(自立・支援)(地域共生)の4項目を柱とした理念を掲げ、管理者と職員は申し送り時に確認し共有している。また、モニタリングを行う際やケアのあり方を検討する時、理念に立ち返り、利用者一人ひとりの要望に沿った自由で安心な生活の実現に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	月番等には参加しているが、この状況の中では日常的に交流は出来ていない状況である。	ホームは地域の一員として自治会に加入し会費を納め、月番の役割にも参加しており、顔なじみの住民と散歩で出会った時は会話を交わしている。ハーモニカやマンドリン演奏、傾聴などのボランティアの訪問があり、交流している。利用者の重度化やコロナ禍のため、地域のイベントの見学や参加は見られなかった。	ホームの活動状況や地域住民の役に立つ情報などを記載した機関誌の発行を再開し、地域住民に配布したいとしている。情報発信することでホームへの理解が更に深まり、ホームと住民が身近になると思われる。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	昨年までは、地域リビングにお手伝いさせて頂いたが、本年度は、地域リビングも現在のところ中止となっている。機関誌においても発行していない状況である。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	面会制限が出ている為、運営推進会議は文章にての開催を行っている。質問や意見に関しては電話対応を行うようにしている。	運営推進会議はコロナ感染予防の為、書面で開催している。利用者の暮らしの様子、事故報告、ヒヤリハット報告、身体拘束廃止に向けた取り組みなどを議事録にまとめ、メンバーの自宅へ出向き届けている。運営推進会議開催時は意見交換できていたが、書面の報告では意見提案が少ないように見受けられた。	運営推進会議を書面で行う際、メンバーが意見提案を出しやすいような工夫が期待される。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議を通じて市町村との連携を図っている。	市とホーム間の質問や情報提供などはファックスで行うことが基本となっており、コロナに関する対策やワクチンの情報も提供されていた。市の集団指導の際や運営推進会議の議事録を市の窓口へ届ける際に、意見交換や情報交換を行っている。担当者からアドバイスを受け検討し取り組んだり、質問にも誠実な対応があり、意見交換しやすい関係を築いている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年2回の研修を行っている。本年度はDVDでの研修を行っており、定例ミーティングの際にも話を行っている。	職員はミーティングで身体拘束になっていることはないか確認している。居室の窓に2か所ある鍵が拘束にならないか検討し、不必要なカギを外し改善している。帰宅願望のある利用者には、散歩やドライブなどで気分転換を図ったり、職員が連携して所在を確認している。スピーチロックについても勉強会のテーマに挙げ具体的に学び、拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束と同様の研修を行っている。職員間で情報の共有も行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人研修として年一回の研修を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	退去の際は、ご家族との話し合いを行っている。また、改定の際には、説明し同意の印鑑を頂いている。疑問等に対しても対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	モニタリング用紙の中に本人の希望、家族の希望の欄を設けている。また、ケアプランの見直し等など、利用者と家族の要望等を聞きながらケアプランの作成、変更を行っている。	家族の面会や電話の際、また家族が参加する誕生日とクリスマス会で、「何かありませんか」と意見など聞いている。家族アンケートにも「話をよく聞いてくれる」と多くの家族が回答している。コロナ禍で面会制限がある中、利用者の近況を知らせる手紙と写真を送り、家族の安心につながっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年1回の職員集会を開催している。そこで職員の意見を提案を聞き理事会などで検討をしている。	ミーティングやモニタリングは全員参加を基本とし、不参加の職員は事前に意見などを口頭で管理者に伝えている。管理者は職員の意見提案を積極的に受け入れ、先ず取り組んでみて、うまくいかない時は再度検討し取り組んでいる。車いすに乗ったまま計測する手作りの体重計、ポータブルトイレやパッドのカバーなど、職員の手作りや工夫が随所に見られた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員、一人一人の状況を把握し、向上心を持って働ける環境づくりに努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員一人一人のレベルアップを図る為に、法人内の研修を実施している。参加出来ない職員にも資料の配布を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	水俣市サービス連絡協議会に所属し、地域密着部会や水俣・芦北ブロック会の中で、他の事業所との交流も図っている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に担当者会議を開催し本人、家族の要望を聞き、職員間でそれを共有している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に担当者会議を開催し、家族の要望を聞き、職員間でそれを共有している。またケアプランにも反映させている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前の訪問でご本人にとってどんなケアが必要であるか検討し、職員間で共有している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員には、入居者の方のできることを見極め、ケアに携わっている。介助しすぎないように気を付けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	現在はコロナウイルス感染症のまん延防止の為、面会制限を行っている。来られた家族に対し玄関での面会をとっている。また、毎月、お便りを発行し家族に送っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現在は、面会制限がある為、来客等は来ていないが、本人にとって大事な場所、畑であったり、墓参りなど可能な限り希望があった際には対応している。	コロナ禍のため面会制限があり、以前のような友人知人の訪問は見られない。面会時は訪問者がくつろげるよう利用者の居室にお茶を用意するなど配慮している。自宅にいた時と同じく、墓参りをしたり畑の作物の成長を見るなど、職員が同行して馴染みの人や場との関係継続支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者の方の性格等も考慮しながら席の配置を行っている。状況を見ながら、席の配置を行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去された方への家族に対して、必要とあれば相談に応じるようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	毎月のモニタリングの中に本人の望むことの欄があり、毎回聞くようにしている。出来る限り希望に添えるように検討している。	利用者との日常会話や、家族から生活歴・趣味などの情報を収集し、利用者の思いの把握に努めている。魚のあら炊きが好きという会話からメニューに取り入れたり、家に帰りたいたいという利用者には家の近くまでドライブしたり、家族に要望を伝え正月帰省につなげるなど、利用者の要望に添う支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に事前訪問の際に、ご家族に記入をして頂いている。また、会話の中からも拾いだし記録に落とし情報の共有を行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎月のモニタリングにて、心身の状態や現状把握を行いながら、現在のケアでいいのか等の検討を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	普段から職員間ではケアのあり方については話している。1/月のモニタリング、ミーティング等で話し合いを持っている。	モニタリングは職員が交代で2か月に1回実施し、全職員で検討している。プランの見直しは6か月に1回を基本とし、利用者・家族・職員の意見を反映し、利用者の要望を大切にしたいプラン作成を心掛けている。モニタリングの結果、プランの変更が必要な際は全員で検討し、現状に即したプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	経過記録等に情報を落とし込み、モニタリングにてまとめ発表し、ケアのやり方が現状でいいのか職員間で話し合いながら行っている。ケアの変更がある際には申し送り等を活用して、職員全員が把握できるよう資している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	常日頃より家族の希望も変わっていくため、その都度プランの変更等を行いながら対応をしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在は、コロナの影響もありなかなか活用できていない状況である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居されてもかかりつけ医に受診を行っている。	かかりつけ医は利用者・家族の希望を尊重しており、2週間に1回の訪問診療で対応、専門医の受診はホーム職員が同行支援している。休日・夜間もかかりつけ医に連絡可能で、受診や医師の指示を受け対応するなど適切に支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常の変化等は看護師に相談をしている。アドバイスをもらい受診するか検討を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	退院前には、病状説明等の会議に家族とともに参加している。常日頃より病院とは、報告、連絡、相談を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した際に病院と家族と事業所での話し合いを行っている。	入居時に重度化の指針について説明し、同意を得ている。重度化した際は家族・医療機関・ホームで話し合いの機会を持ち、検討の結果入院となっており、看取りの経験はない。職員は利用者の日常生活を大切にして、家族の安心と利用者を笑顔にする支援を心掛けている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年に1回は救急救命の研修を実施している。本年度は11月24日、25日、26日の3日を予定している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練の実施。水害時の訓練については今後実施する予定にしている。	昼・夜を想定した避難訓練を定期的実施している。出火場所により、避難経路と避難場所を確認し、冷静且つ適切な行動につながるよう努めている。自然災害では気象情報や川の水位を確認するなど情報収集に努め、管理者の指示のもと早めに避難を開始する。また、大雨や津波の際の避難場所もそれぞれ確認している。昨年秋の台風時には男性職員2名が自主的にホームに待機し、利用者の安心と安全確保に努めていた。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人格の尊重した声掛けを実施している。一人一人の対応に差がある為、今後も研修等sを行っていく必要がある。	脱衣室の入り口のドアにカーテンをつけ、プライバシーを確保している。言葉使いは相手を尊重し、丁寧な言葉かけを心掛ける。また、利用者が理解しやすいよう方言を使う際も温かみのある言葉を使い、利用者に安心感を与えている。管理者は利用者や職員の日常のかかわりから、職員によって人格尊重の理解に差異があると感じている。	管理者は継続した研修の必要性を認識しており、定期的な研修の実施が職員の意識の向上につながると思われる。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の意思を尊重したケアを心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	重度化が進み、なかなか希望には添えない部分もあるが、出来る限り、ご本人のペースに合わせている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	出来る限り、ご本人が望まれるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	以前と比べ入居者の方が重度になってきており、以前できていたことができなくなってきている。できることを見つけ手伝ってもらっている。	食事作りは職員の当番制になっている。担当者は最近のメニューを確認し、同じ食材が続かないように変化のあるメニューを心掛け、季節感や盛り付けにも気を配っている。ひな祭りなどの季節の行事食や、誕生日は本人の好物を提供し、駅弁を注文する、利用者がそばを打ちみんなでいただくなど、食事を楽しむ多様な取り組みが見られた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分量の管理を行っており、食事量の低下がみられる方に関しては、エンシュアなどの補助食品の提供を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の口腔ケアの実施。介助の必要な方もスポンジブラシにて対応している。うがいに関してもお茶でのうがいを促している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを理解し、その時間に合わせたトイレ誘導を行っている。	昼間は可能な限りトイレを利用するが、パッド交換の利用者もいる。排泄パターンの把握や排泄のサインをキャッチして、一人ひとりに合った声掛けや誘導・見守りで自立支援に努めている。パッド交換の利用者も、排便時はトイレを利用するなど快適性に配慮していた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘傾向の方には、寒天等を提供して対応をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は、1人ずつ入っている。スタッフと話しながらゆっくりと入ってもらっている。その方の希望に沿って行っている。	週2～3回の入浴を基本としており、熱い湯・ぬるい湯・長湯・短い湯など利用者の好みに合わせている。ぬるい湯を好む人には暖房を入れて冷えないようにするなどの配慮が見られた。入浴中は会話が弾み、楽しい時間となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その方の状況などを考慮しながら無理はせず、午睡等を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	新しい薬が処方された際は、申し送り等にて職員全員が把握できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居する前に生活歴を書いて頂いている。それをもとにケアにつなげていけるようにしている。出来ることをお願いし役割を持っていただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	本人の希望により、畑や墓参りに行っている。また、自宅へのドライブも行っている。	弁当を持参しての桜の花見や、観光農園でアイスクリームを食べることもある。また、そうめん流しに出かけるなど自然を感じる外出支援がある。玄関前の庭にテーブルを出して食事をしたり、週1回、移動販売車の訪問時に自分で選んで買い物をするなど、楽しく気分転換を図っている。家が気になる人には自宅までドライブするなど、個別の対応も見られた。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	施設内ではお金は預かっていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望により電話等を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	できる限り、季節感を出すように心がけている。ホーム自体が狭いため、余計なものはおかず、入居者の動線を確保している。	玄関や洗面所などに季節の花を活け、明るい雰囲気である。廊下の壁には、月ごとの行事や暮らしぶりなどを紹介した写真を掲示しており、利用者の充実した暮らしが感じ取れる。リビングでは、利用者と職員がチラシを見ながら食べたいものを相談している光景や、キッチンからは料理する音やにおいがして家庭的なぬくもりが感じられ、利用者は穏やかな時間を過ごしていた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	席の位置など、日々考えながら配置を行っている。入居者の状態に応じて変えている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が使い慣れた茶碗やコップ、部屋には家族との写真等を飾ったりと過ごしやすい環境作りを行っている。	居室は、利用者になじみのある畳と障子の部屋にベッドが置かれている。ベッド柵に取り付けたケースにブラシ・髭剃りなどを入れ、孫の手など必要なものを身近に置いている。筆筒に、シャツなど衣類の名称を貼って自分で整理するなど、利用者の自立と安心につなげる工夫と配慮が見られた。ポータブルトイレやパットに手作りのカバーをかけ、プライバシーにも配慮していた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	本人の出来ることを見極めながら介助を行ったり移動の際の動線を考えながらの部屋の配置を行っている。		